

《修士論文要旨》

文化財としての戦争遺跡

古 川 実 穂*

これまで近代の戦争は史料や戦争経験者からの聞き取りを中心に調査・研究が行われてきた。しかし、史料からの研究についてはアジア太平洋戦争の敗戦により軍事重要機密とされていたものが敗戦により焼却処分され、その多くが失われた。また聞き取りによる方法は戦後約70年が経過し、戦争経験者の減少や高齢化により現在ではほとんど不可能に近い状態になりつつある。そのような中、戦跡考古学という考古学的手法を用いた研究分野が確立され、地中に埋まった戦争に関わる遺構や遺物からの調査研究例は着々と進められてきた。

しかし、現在、日本国内に存在する戦争遺跡は地中に埋まったものばかりではなく、地上にその痕跡を残すものや構造を持つもの、さらには地上及び地中にわたって構造を持つものなど多様な状態で残存している。それらは一部保護活動を中心に調査が行われているものもあるが、学術的研究対象として認識は十分とはいえず、研究もあまり進められていない。

そこで、そのような地上地下に立体的な構造を持つ戦争遺跡の調査・研究方法の一つとして、近年技術の進歩により比較的利用しやすくなった3次元レーザー計測を使用する調査方法を提案する。複数の構造を持つ戦争遺跡を1つの空間として記録し、その構造や現状を把握することにより遺跡の実態をつかむという研究方法を検討するというを目的に議論を進めた。

3次元レーザー計測による調査・研究の実例として、長崎県西海市に存在する佐世保要塞を構成していた砲台堡壘である石原岳堡壘の現地調査を行った。石原岳堡壘は明治期に建設され、佐世保鎮守府を中心とした軍港の防御を担い、太平洋戦争終結まで機能していた戦争遺跡である。現在は森林公園として活用されており、兵器類や建築物は残っていないものの建設当時の堡壘構造の大部分がそのままの状態に残存している日本において非常に貴重な遺跡である。遺構は主郭部の砲座をはじめとして、掩蔽部や通路などの地下遺構、周囲を取り巻く外堀などがあり、それら複数の遺構を総合的に空間としてとらえることにより、遺跡の実態に迫れると考えた。

現地調査での3次元レーザー計測、その後のデータ処理により、石原岳堡壘の主郭部についての3次元モデル化を行い、空間として遺跡をとらえることができた。また、その中で、戦争遺跡に3次元レーザー計測を用いることの有効性及び課題点が明らかとなり、今後の研究の展開について検討を行った。

また、長崎県佐世保地域は石原岳堡壘をはじめとして、堡壘砲台や鎮守府関連施設、防空壕など多様な戦争遺跡が残っている地域である。それらを時期別・機能別にまとめることにより、佐世保地域の戦争遺跡群の実態把握を行い、軍港都市としての発展を考察した。

また、戦争遺跡に対する現在の状況を行政的な側面や日本及び諸外国の活用事例をまとめ、問
平成24年度 *文学研究科文化財史料学専攻

題点を探り出した。

前述したとおり戦争遺跡の状態は様々であり、その状態に適した調査・研究方法が望まれる。地上及び地下にその構造を持つ砲台堡壘のような立体的な構造物はその立体的なまま記録し検討をすることにより、はじめて遺跡の実態把握ができるのである。実際に現地調査によりその方法は3次元レーザー計測により、十分に可能であることが証明された。また、この方法は戦争遺跡だけではなく、中世の洞窟寺院遺跡や古墳の石室などの調査例も登場しており、今後発展が期待される研究方法である。

戦後75年が経過し、近代の戦争研究の次なる段階に進むべきところに達している。戦勝国や戦敗国、加害性被害性などというイデオロギーに左右されず、客観的視点で実証的な史料として戦争遺跡を基に研究が必要であると考え。そのような遺跡からの研究はこれまでの戦跡考古学の視野を広げることになりさらなる発展ができるのではないだろうか。

また、そのような研究は過去のあらゆる問題点に向き合うことになり、大きな痛みを伴う可能性もあるが、早急に保護対策が必要な戦争遺跡も存在し、学術研究が進み文化財としての価値定義が行われることにより、後世に向けても歴史的資料が残されていくことにもつながっていくのである。